

Human ヒューマン

2016.1 Vol.06

CONTENTS

02 **特集**
あなたの海外体験を聞かせてください!

04 **スイス滞在で考えたこと (在外研修報告)**
日本文化学科 教授 手塚 薫

05 **就活応援**

06 **ゼミ紹介**
日本文化学科 テレングト アイトル 3年ゼミ (1部)
英米文化学科 川上武志 3年ゼミ (1部)

07 **人文学会レポート**

07 **英語教育研究会**

裏表紙 **人文学部 TOPICS**
人文学の挑戦／ビブリオバトル

文 学
文化を学ぶ
世界と繋がる

あなたの海外体験聞かせてください!

人文学部の学生たちの多くは、在学中に様々な国（あるいは地域）を訪問し、貴重な体験を得ている。今回は、その中から10名の学生たちにお話し、アンケートに答える形で自分の体験を語ってもらった。

アンケート項目

- 1 渡航先
- 2 渡航時期（滞在期間）
- 3 どうしてその国（あるいは地域）を訪問しようと思いましたが？
- 4 訪問前、その国（あるいは地域）に対して、どのような印象をもっていましたか？
- 5 実際の印象はいかがでしたか？また、訪問の後、あなたに何か変化はありましたか？

イギリス

英米文化学科 3年
新井田 奈摘



- 1 イギリス、ウェールズ、カーディフ市、カーディフ大学
- 2 2015年2月～3月（約1か月間）
- 3 日本語教員の教育実習に参加するため。
- 4 政治・経済共に世界の中心にある歴史的にも重要な大国。大英帝国。
- 5 各個人がイギリス人としての誇りを持ち、歴史や文化を大事にする印象。堂々としていた。再度日本の歴史や文化を振り返り、日本人としての誇りを持つような人になろうと努力を始めた。

ハリ・ポッターで有名なキングス・クロス駅の9と4分の3番線で写真を撮る新井田さん



インド

英米文化学科 1年
清水 香子



子供たちと一緒に食べた最後の夕飯（カレー、プリアンのようなもの）、ミルク粥

- 1 インド、チェンナイ、デリー、ガヤ
- 2 2015年8月下旬～9月上旬（約1か月間）
- 3 たまたま紹介を受けたボランティアの訪問先がインドだった。
- 4 人と車で道がごちゃごちゃしている。スリ等の犯罪が多い。カレー。目撃者よい。
- 5 確かに、道は人とバイクで溢れていて、その勢いに圧倒されていた。初めはすべてに警戒していたが、私が今回出会った方が皆親切で、帰国前は日本とのありすぎるギャップを楽しめるまでになっていた。インドは、空気も人も日本とは大違いである。また、環境はとても綺麗とは言えない。首都でさえ下水の臭いがして、地面はポロポロでゴミだらけ。それでも一か月も滞在していれば何ともなくなっていた自分に驚いた。食事毎カレーだったため、自分も現地の人と同じ匂いになっていた。地元の小学校を訪問すると、皆「勉強が好き」と一生懸命勉強していた。生徒本来の学びに対する姿勢を見せられたようだった。今しかできないことを存分にやろうというやる気もらった。



デリーの商店街（よく声を掛けられました）



子供たちに文房具をプレゼント（喜んでくれました）中央にいるのが清水さん

カナダ

英米文化学科 4年
兼成 梨奈



ブラジル人のクラスメイトと一緒に

- 1 カナダ、オンタリオ州、セント・キャサリンズ市、ブロック大学（協定校）
- 2 2013年9月（3週間）
- 3 訪問した大学が人文学部の留学プログラムに指定されていたため。英語習得を目的に行くので、発音のなまりが少ない地域に行きたかったため。カナダの環境面が安心できたため。
- 4 北緯が43度と札幌と同じであったので、気候や環境面から初めての留学先として安心できるという印象を持っていた。ナイアガラの滝が留学先の大学から近いこともあり、観光も楽しかった。
- 5 留学前は、初めての海外・初めての留学だったので、不安を感じていたが、本当に過ごしやすく、留学が終わるころには、日本に帰るのがむしろ寂しくてたまらないほどだった。暖かい人々と環境に恵まれた3週間となった。



ホストマザーとブラジル人のルームメイトと一緒に

この冬、内閣府が主催している青年国際交流活動（シップ・フォー・ワールドユース・リーダーズ事業）への参加が決まった。カナダでの留学を経験し、もっと英会話を上達させたいと思ったことと様々な文化をもつ方たちと交流することに興味をもったためである。また、この事業に関わったことがある先生からお話を伺い、楽しそうなプログラムなので、ぜひ参加したいと思ったことが決め手になり、参加を決意した。

ロシア

英米文化学科 2011年卒（公務員）
佐藤 友美
日本文化学科 2年
福澤 沙織



- 1 ロシア、サハリン州、ユジノ・サハリンスク市、サハリン大学（協定校）
- 2 2009年9月（約2週間）＜佐藤＞
2015年2月4日～3月14日（1か月半）＜福澤＞
- 3 ロシア語を履修しており、以前から訪問してみたかった。＜佐藤＞北海道から最も近い外国であり、日本と関わる深い文化があることに興味をもっていたため。＜福澤＞
- 4 寒くて暗いイメージ（人間も）、物騒、閉鎖的、近くて遠い。＜佐藤＞
人に無関心、無表情で冷たい印象が強かった。また常にウォッカを飲んでいるイメージが強かった。＜福澤＞
- 5 意外と全体的に明るい印象だった。日本で当たり前前かがみ通じなく、自分が日本人であることを自覚した。何事も自国基準で考えていたことに気づき、視野を広げるきっかけになった。＜佐藤＞



左端が佐藤さん



前列左端が福澤さん

韓国

日本文化学科 3年
浅見 斗萌乃

①大韓民国、大田市、大田大学（協定校）
 ②2015年2月25日～（約11か月）
 ③高校2年生の時に偶然見た韓国ドラマから韓国に興味を持ち始めた。そして大学では一般教育科目である韓国・朝鮮語を履修した。大学2年生の時に韓国人や韓国の文化に直接触れる機会があり、そこからドラマで見る韓国よりも実際の韓国人や文化に興味を持つようになった。それでもっと韓国人や文化に触れたいという単純な思いから留学に行くことを決めた。

④最初はほとんどドラマから見る韓国しか知らなかったのですが、そのイメージがとても強くありました。それで韓国人はすぐ怒ったり泣いたり喜んだり、喜怒哀楽の表現が豊かそうだと思っていた。

⑤実際に行ってみると、やはり韓国人は日本人よりも喜怒哀楽が豊かだった。特に怒ることに関して、とてもそう感じた。道端でカップルが大声で喧嘩をしていたり、タクシートの運転手のおじさんが進まない前の車に対して怒鳴っていたりする場面をよく見かける。また韓国人は日本人のように本音と建て前を使わずとても正直である。それでたまに傷つくこともあるが、正直なことは相手と隔て無く話すことができるということなので良いなと思うようになった。

また私が韓国に行き変わったことは、一人でいることに寂しさを感じることであり、日本では一人でご飯を食べたり買い物をしたりすることは普通であり、誰もかすと思うが、韓国ではそうではない。韓国では何をすることもほとんど誰かが一緒にいて、みんなで楽しくという精神が強いように思われる。私がある時一人でご飯を食べたと知った韓国の友人が「一人で食べるなんて悲しいじゃないか。これからはしないで。」と言った。その時は別に一人で大丈夫なのになと思ったが、毎日友人たちと一緒に生活をしていく中で段々と、ご飯を食べる時や散歩をする時は誰かと一緒にいたいと思うようになり、一人だと寂しく感じるようになった。



学内のフードフェスティバルで（前列左端が浅見さん）



大田大学

ロシア

英米文化学科 2年
太田 莉央
英米文化学科 1年
根本 誠士

①ロシア、ウラチーミル州、ウラチーミル市、ウラチーミル大学（協定校）

②2015年8月11日～9月7日（約4週間）

③ロシアには昔から興味を持っていて、この機会に行きたかったから。（太田）

ロシアからの留学生に会ってとても衝撃を受け、この人達がどのような文化で暮らしているのか知りたくなったから。（根本）

④全体的に良く分からないといった印象。（太田）
寒いところ。酔っ払っているおじさんが多い。何かにつけてウオッカ。それ以外は何も知らなかった。（根本）

⑤日本のようにきちりとしていないが、それが「ロシアらしい」と感じたり、それが良さの一つだと思った。訪問してから、更に積極的に行動していこうという気持ちになった。（太田）
穏やかな・親切な人が多い。報道とは異なり静かで美しく素朴な国だった。ヨーグルトとマヨネーズが好きらしく、スーパーの売り場も広く種類も多かった。（根本）



ボクロフ・ナ・ネルリ教会（ウラチーミル市郊外ポコルーボヴォ村）



日本紹介フェスティバルにて



青年フォーラムにて（右端が太田さん、右から6番目が根本君）

ベトナム

日本文化学科 2年
庄本 大

①ベトナム、ハノイ、ニャチャン、（カインホア省）など

②2014年1月（約1週間）

③成熟しきっていない国で、“赤い”政府の下での人々の暮らしに興味があったため。また、初めての海外だったので、時差のあまりない国に行ってみたくかったため。

④とても貧しく、また暮らしの中で使用されている技術は旧来のもので非効率。常に前後左右に気を張り巡らしていないと危険。

⑤都市部では、日本の日常で見受けられるごく当たり前のレベルの技術製品が使われており、大半の人々は商売が生活とあまりにも近い距離で直結している。貧困層は相当数いるが、富裕層も想像していたよりも多くいる。

身なりにおいて、所得生活水準の表れが顕著である。帰国後、生まれてから当たり前で使用しているすべて、日本の高い公衆衛生水準やメンテナンスが行き届いたインフラに感動させられるとともに、感謝の気持ちが生まれる。

ベトナムと日本を比較して思った事であるが、人々のにぎわいや、人と人のコミュニケーションなどは日本は到底ベトナムにはかなわないと感じた。高度経済成長期の日本もこのような感じであったのだろうかと思いを遣らせ、自分は到底知るはずのない日本の時代を知ったような、少し懐かしさを感じるベトナム滞在であった。



ハノイ最古の仏教寺院といわれる鎮国寺



ベトナム風サンドイッチ「バイン・ミー」



フランス統治時代に建設されたオペラハウス

英米文化学科 3年
浅海 宏一郎

①北方領土（択捉島）

②2015年9月24日～9月28日（根室市内での研修会や移動も含む、択捉に滞在した期間は2日間）

③昨年色丹島に訪問した友人や先輩の話聞いて、自分も北方領土問題に関心を持ったため。

④何が起きかわからないような危ないところ。

⑤日本とは違って不便な面もあったが、自然が残っていて景色が素晴らしく、島民の皆さんもとても優しくあったのが印象的だった。

早く領土問題が解決して、いつでも自由に行けるようになってほしいと思った。

ホームビジットで訪問した家族と（左から3番目が浅海君）



島の学校からの散布山の眺め



住民交流会の会場



外国ではないのですが

SWISS STAY

スイス滞在で考えたこと / 日本文化学科 教授 手塚 薫

在外研修によるスイス・チューリッヒでの滞在が2ヵ月を経過しました。クリスマスシーズンを迎え、街の要所にはクリスマス市ができ、多くの市民で賑わっています。スイスと聞けば、アルプス、チーズ、永世中立国、あるいは時計などの精密機械産業を連想するでしょうか。しかし、スイスを要約するとしたら、3つの言葉がふさわしい気がしています。それは噴水（水飲み場）、イヌ、渋滞です。



ユートリベルクからチューリッヒ市内を見渡す（中央はチューリッヒ湖、右奥にアルプス）



アジア美術品を共同調査しているM・ウェルンストールファー博士（チューリッヒ大学附属民族学博物館キュレーター）と筆者

スイスは水の国といわれ、アルプスを水源とする天然水が水道でも使用され、そのまま飲用できます。飲んでみると、硬水というよりは軟水に近い印象です。また、歴史ある旧市街に点在する小さな噴水でも、市民がのどを潤す光景に出会えます。特別な表示がなければ、どこでも安心してそのまま飲むことができます。



市内の噴水（水飲み場）

いまや伝説と化した遭難救助犬バリーは、アルプス山中で旅人を40人以上も救ったセントバーナード犬で、木製の樽を首からつり下げた勇姿（剥製）はベルン自然史博物館に展示されて国民的なアイドルとなっています。そういう歴史があっただけで、スイス人にとってイヌはペット以上の存在です。実際スイス人は、イヌと連れだって外出します。よくしつけられているために公共交通機関でもおとなしく、吠えている姿をほとんど見かけません。

渋滞は、ラッシュアワーでなくても日常的によく目にします。理由は坂が多く道路が狭いことに加え、トラム（路面電車）が縦横に走り回り、冬でも自転車が多いからです。公共の駐車スペースはいつも車で占有されており、警官が違法駐車を厳しく取り締まります。要するにスペース



市内のいたるところでイヌに出会えます



子どもに大人気のクリスマストラム

が足りないのです。同じことは住宅についても当てはまり、古いアパートでも入居の順番待ちが生じます。その結果は賃料が跳ね上がることに繋がります。私が大学から斡旋していただいた好条件の物件といわれるアパートでも、一ヶ月1800スイスフラン（現在の相場で221,400円）です。市内の一等地から離れたリマト川右岸のキャンパスに近い閑静な文教地区に立地しており、入居者は大学生中心で、フローリングの床がきしみ、部屋全体がゆがんでいるような古い建物の価格です。スイス人の話によれば、戦禍でイン

フラは破壊されずにそのまま残ったため、古いものが多く、修理を繰り返しながら使っているというのです。

スイスと日本とのかわりは意外と知られていません。2014年にスイス日本国交樹立150周年を迎えましたが、メディアの扱いも小さいものでした。私の受け入れ先になっているチューリッヒ大学アジア・オリエント研究所では、2015年に話題になる出来事がありました。東洋美術史が専門のハンス・トムセン教授が1886年から7年間横浜のスイス領事をしてきたアルノルド・ドゥムリンが日本から持ち帰った大量の資料をフラウエンフェルトの倉庫で発見しました。日本語を流ちょうに話し、日本の芸術や文化にも造詣が深かったドゥムリン資料の中には何が含まれているのか、今後の調査に期待が持てます。私の研究との関連でいえば、スイスにはそうとは知られずに、日本美術やアイヌ文化にかかわるコレクションが、まだまだ多く眠っている可能性があります。主に19世紀に日本から持ち出された文化財の同定や保存活動に少しでも尽力できればありがたいと考えています。



アジア・オリエント研究所で開催されたエチオピアのシンポジウムで薫り高いコーヒーをいたたく筆者



アジア・オリエント研究所

チューリッヒ大学のすぐそばに、スイス連邦工科大学があります。歴史はチューリッヒ大よりも浅いとはいえ、物理・化学分野での業績はめざましく、20人以上のノーベル賞受賞者を輩出しています。残念ながら、明治の末にここで学んだ日本人留学生らが帰国後日本の近代化を担った事実はあまり知られていないようです。教育研究においても両大学は緊密に連携をとりながら、施設を共同で利用するなどして、互いに発展を遂げてきました。たとえば、大学附属博物館は大小様々で種類も多く、恵まれた環境のなかで、学生は個別的な専門分野とは別に自らの関心を深めていくことができます。日本では国立大学の人文社会科学系学部の改組が話題となり、実学重視の方向に舵をとりつつあります。長期的な視野に立ちながら文理のバランスをうまくとるスイスの教育システムとの乖離が気になります。大学附属博物館は一般にも開放され、入館料は徴収していません。市民に寄り添い、地道な社会貢献を果たすことで、実は効果的な大学の宣伝にもなっているのです。謙虚に見習うべき点は少なくありません。



チューリッヒ大学附属人類学博物館



スイス連邦工科大学に通ったアインシュタインの銅像

日本文化学科

テングト アイトル
3年ゼミ(1部)

人文学において、文学が人間の情緒・感情言説を扱うのは自明のことですが、日本文学は当然、日本の情緒・感情言説を取り扱うこととなります。しかしわたしのゼミではそういった一国家・民族・地域に限定せず、日本文学はいかに越境して他の国の情緒・感情言説と接触し、吸収し、影響を受けてきたか、あるいは他国のそれらを受容し、変容し、または抵抗してきたのかを考察しています。考察の対象は主として国民文学とされてきたオーソドックスな小説か、あるいはその逆に国民文学から掛け離れた「越境文学」(日本人作家でありながら外国へ、外国人作家でありながら日本へ越境して創作した文学作品)を中心に考察します。したがって、複数の国家・民族・地域・文化・言語にわたって比較し、横断して鑑賞します。作品を読み解くには複眼的・比較文学的な視点と方法をとっていますが、そこで、つねに問いかけているのは、われわれの情緒・感情言説、あるいは文学とはいったい何でしょうか、それは人びとの内面世界において、あるいは文化においてどのような役割を果たしているのでしょうか、神話時代から現

在まで人びとがなぜ必要とされてきたのでしょうか、といったような基本問題です。実際、これらの問いかけは、そのままそれぞれの個人につながり、それぞれ自分に向けての問いかけでもあります。そして、文学作品の鑑賞、比較、批評、横断するなか、学生各自は自分なりのテーマを見出し、論文作法の指導のもと、卒業論文として実るよう訓練を受けます。ゼミにおいて、資料・情報の調査、分析、まとめ、報告ないしディスカッションなどの基礎訓練を重視する一方、とりわけ、幅広い人文知識を身につけ、クリティカル・シンキングの能力を持つ自立した社会人になっていくことを期待しています。



ゼミ紹介

英米文化学科

川上武志
3年ゼミ(1部)

ゼミ生A 僕らのゼミを紹介するということなんだけれど。まず、メンバーは…
 ゼミ生B 男子学生4人と女子学生が7人だけれど、文学系のゼミはどうしても女子のほうが多くなるんだよね。
 ゼミ生C それにイギリス文学を専門にしている指導教官がいるわ。
 ゼミ生A 次に、ゼミではどんなことをやっているということなんだが。
 ゼミ生B 指導教官の専門分野の‘華’と呼ばれる英詩を読んでいるけれど、これがまたねえ。
 ゼミ生C ゼミが始まったころに、私たちが英詩に慣れてないということで、ポップスの英語の歌詞を読んだのが印象に残っているわ。カーペンターズやサイモンとガーファンクルやイーグルスだったわね。それからトマス・ハーデイのパラッドをもね。
 ゼミ生B ところが後期になって、本格的な

イギリス現代詩ときた。テッド・ヒューズ、シェイマス・ヒーニーか。難しいよなー。

ゼミ生A でも使っているテキストは、ある外国人講師が日本人の学生向けに行なった授業をもとにして書かれたもんだよね。

ゼミ生C それに、現代詩人のテーマは私たち自身の問題でもあるんじゃない? 大変だけれども頑張りましょう。

ゼミ生A,B (空気で) 頑張りぞー。



人文学会レポート

北海学園大学人文学会第3回総会・大会

「文化の諸相」



主催：北海学園大学人文学会
共催：北海学園大学人文学部、北海学園大学大学院文学研究科

パネリスト(発表順)

上野誠治 (英米文化学科教授)
佐藤貴史 (英米文化学科准教授)
郡司 淳 (日本文化学科教授)
須田一弘 (日本文化学科教授)

司会 安酸敏眞
(英米文化学科教授)

11月14日(土)、豊平校舎 AV4 教室にて、人文学会総会に引き続き、「文化の諸相」をテーマにパネリスト発表とディスカッションを行いました。

人文学会とは、本学部教員を主要な構成メンバーにした学術交流の場です。2013年に第1回目のシンポジウムを開催、昨年の第2回大会では、人文学部の必修科目「人文学概論」テキストである、安酸敏眞先生の著書『人文学概論——新しい人文学の地平を求めて』（知泉書館、2014年）を、各専門分野の4人のパネリストが語り合いました。今年度は、それらを踏まえてのシンポジウムとなりました。

言語学、英語学が専門の上野先生は、「ことばの中の認識の違い」。思想史が専門の佐藤先生は、「宗教について——『文化を学ぶ、世界と繋がる』」。日本近代史、軍事史が専門の郡司先生は、「日清戦争従軍兵士の自他認識」。生態人類学が専門の須田先生は、「食行動からみる文化」でした。

司会の安酸先生は、各分野にわたる会場からの質問にも滞りなく対応し、短い時間ながらも充実したディスカッションの場となりました。

なお、当日の記録は、『人文論集』61号（2016年8月末刊行予定）に掲載され、同時に、北海学園大学情報リポジトリ・HOKUGA (<http://hokuga.hgu.jp/>)でも公開されますので、ぜひご覧ください。



英語教育研究会

この研究会は、英語教職を志す学生、教育職に就く卒業生、本学教員の有志によって運営されています。2015年は1月の第1回研究会に始まり、12月まで計5回の研究会を行いました。その内容も、卒業生による教育実践の発表、教員採用試験に向けた講習会、専門家を招いた講演など多岐に渡ります。10月には、大和知史先生（神戸大学）、磯田貴道先生（立命館大学）を招き、音声（プロソディー）指導に関わるセミナーも実施しました。今後も学生や卒業生のニーズに合わせた研究会や外部講師を招いてセミナーを実施する予定です。



人文学部 TOPICS

人文学の挑戦

2014 年度に始まった人文学部主催のイベント「人文学の挑戦」は、今年度中に第 8 回目を迎えます。いずれの回も、会場となった紀伊國屋書店札幌本店 1 階のイベントスペース（インナーガーデン）に来場者が入りきれない程の大盛況でした。様々な年代から多くの聴衆が集ったことから、大学での知的果実を社会に還元する試みが着実に成果を上げていることがうかがえます。

今年を振り返ると、文部科学省が国立大学に人文社会系の学部や大学院の組織見直しを迫った通達に象徴されるように、「実学志向」、効率優先の風潮が勢いを増しているように感じます。このような状況にあっても、人文学部は、これまで通り幅広い教養と深い知識を備えた人材を育てる場として、また、研究と社会をつなぐ拠点として、同様の取り組みを提案して参ります。

第 5 回 6 月 7 日 (日)
15:00 ~ 16:30

『書棚から歌を』

(深夜叢書社) 刊行記念イベント
「歌う=訴う(うったう)=唄う」
田中綾 日本文学学科教授 ×
岡大介 (演歌師)



第 7 回 10 月 25 日 (日)
15:00 ~ 16:30

『身近な言語学一』

言葉の秘密、言葉への挑戦
講師 上野誠治 英米文化学科教授
講師 徳永良次 日本文学学科教授



第 6 回 8 月 23 日 (日)
15:00 ~ 16:30

『源氏物語を読んでみよう』

講師 井野葉子 日本文学学科准教授



第 8 回 12 月 19 日 (土)
14:00 ~ 15:30

『今こそ読みたい、「天皇の軍隊」一著者の大濱徹也先生に聞く』

講師 大濱徹也 筑波大学名誉教授・元北海学園大学人文学部日本文学学科教授
聞き手 郡司淳 日本文学学科教授



ビブリオバトル

【全発表本】

- ①手塚治虫『奇子(あやこ)』2巻 講談社、1981年
- ②『SF マガジン 伊藤計劃特集号』2015年10月号、早川書房
- ③『キャッチコピーの表現別グラフィックス』バイインターナショナル、2010年
- ④『ユリカ 2・5次元特集号』2015年4月臨時増刊号、青土社
- ⑤こざき亜衣『あさひなく』1巻 小学館、2011年



10月24日(土) 13:30 ~ 14:30@D41、人文学部主催で、「全国大学ビブリオバトル 2015 北海道 A ブロック予選会」が開催されました。バトル(発表者)は人文学部と法学部の学生 5 名で、ディスカッションタイムには、大学院生や卒業生からも質問があり、本を通じた知的交流を深めることができました。

みごと「チャンプ本」に選ばれ、11月28日(土)開催の「地区決戦 A」@拓殖大学北海道短期大学への切符を手にしたのは、人文学部日本文学学科 3 年生、吉田桃香さんです。発表本は、『キャッチコピーの表現別グラフィックス』(バイインターナショナル、2010年)でした。

ヒューマン 2016.1 Vol.06

編集・発行:北海学園大学人文学部

〒062-8605 札幌市豊平区旭町4丁目1-40 <http://human.hgu.jp/> TEL.011-841-1161(代表) FAX.011-824-7729

表紙キャッチコピー:

文化についての深い理解を涵養することが異文化社会に生きる人々と真のコミュニケーションを結ぶ力になる、という人文学教育の理念をあらわしたものです。

制作・印刷:(株)アイワード

PD:馬場康広[(株)アイワード 2000年人文学部日本文学学科卒]